○○してみました世界のフィールド

「みんぱく村に神楽がやって来る！」ワークショップの軌跡

神野 知恵
民博 機関研究員

伊勢大神楽を「みんぱく村」に迎えてみました

ワークショップに先立ち、寄せ囃子の館内放送をする神楽師と筆者（筆者は中央）

昨年 12 月、みんぱく年末ワークショップにおいて、民博（みんぱく村）に伊勢大神楽がやって来た。今号では、その企画者であり、準備に奔走した筆者の目線をとおして、企画の立ち上げから当日の様子までをレポートする。

伊勢大神楽とは

伊勢大神楽をご存知だろうか。「毎年うちに来る」という読者もいらっしゃるかもしれない。伊勢大神楽は、西日本各地の村々を訪ねて、厄祓いの獅子舞や曲芸を奉納することを仕事とする人びとである。今でもほぼ一年中旅をしながら暮らしている。一般に獅子舞は正月の縁起物というイメージが強いが、地域によっては春、夏、秋に大神楽を迎えるところもある。二〇一六年の秋に小豆島に初めて調査に行くまで、わたしはその事実をまったく知らなかった。

「みんぱく村」に大神楽を迎える

わたしはその後、伊勢大神楽研究にのめり込み、大阪や滋賀をはじめ、瀬戸内海の島々や岡山の沿岸部などの村々を神楽師とともに歩いてきた。村人たちが玄関先でワクワクしながら獅子舞を出迎え、有難く頭を噛んで貰っている姿を見る度に、自分がもしこの村の住民だったらどんな感じだろうかと想像してきた。大阪で働くようになってから、大神楽が来る地域に住んでみたいという想いはさらに膨らんだ。

そうこうするうちに、みんぱくで伊勢大神楽を招聘することになった。非常勤の機関研究員とはいえ、みんぱくはまぎれもなく自分が所属する共同体である。いわば自分の「村」に大神楽を迎えることになったのだ。せっかくならば単純に演舞を観覧するだけの公演ではなく、実際の村廻しのように大神楽を迎える村人の気持ちを体験できるワークショップにしようと考えた。

「村長室」（館長室）でお祓いを受ける吉田憲司館長（撮影：出水伯明）

日本、大阪

村での出来事を徹底トレースする

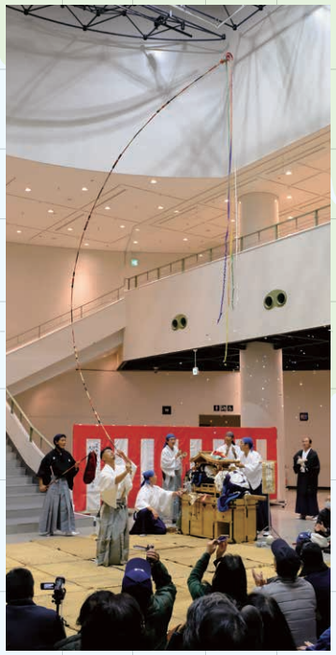
村々ではむかしから、自治会長や青年会などが大神楽の世話役を担ってきた。住民に日程の案内を出し、神楽師に昼食をふるまい、総舞（神社などでの曲芸や獅子舞の奉納）に必要な筵を用意するなど、大忙しである。今度はわたしがその役割を担うのだと思うと、緊張感が高まった。現場で見てきた熱い心のやりとりをみんぱくでも繰り広げたいという想いで、準備に奔走した。当日は、朝早くハイエースで乗り入れる大神楽一行を出迎えるところから始まり、村への到来を知らせる「朝神楽」の奉納に続いて、館長室、収蔵庫、展示場、管理部事務室や研究部各所など、計二〇カ所で獅子舞によるお祓いがおこなわれた。個人の研究室も事前申し込みを受け付け、特に特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」を直前に終えたばかりの山中由里子教授の研究室でのお祓いには力が入った。

一番気がかりだったのは昼食の接待だった。わたしはお祓いに同行するため食事の準備ができない。そこで総合研究大学院大学の学生、外来研究員、わたしの友人などで構成された有志の精鋭スタッフを「みんぱく村婦人部」と名付け、調理を担当してもらった。心のこもった数々の料理は皆美味しかった。こういった陰の功労者なしに神楽の接待は不可能だということが改めてよくわかった。昼食が済むと、午後一時から総舞が始まる旨のアナウンスと、笛太鼓の寄せ囃子を守衛室から生放送した。これもぜひ再現したいと思っていた「よくある村の風景」のひとつだった。

特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」プロジェクト研究室で獅子に頭を噛んで貰う山中由里子教授（撮影：稲垣諭）

村廻しの力は継続性にあり

ワークショップ本番は、特別展示館を神社の境内に見立てておこなった。ふつう、境内に敷く筵はその村にあるものを使用するが、今回は山本源太夫社中を通じて式内社大津神社（大阪府羽曳野市高鷲）からお借りした。会場には、一般来館者を含め、三〇〇人を超える老若男女の「村人」が来場し、神楽師たちの旅の話に耳をかたむけ、剣三番叟や長水の曲などの曲芸に歓声を上げた。最後にはワークショップで学んだ「伊勢音頭」を歌いながら、優美な獅子の花魁道中（魁曲）に見入った。その一体感は本物の村さながらだった。終演後、頭を噛んで貰おうとたくさんの人が待つ列を見ながら、二〇〇年以上続く伊勢大神楽の歴史のなかで、みんぱくとの縁が点ではなく線として続いていくように心のなかで願った。関係性を継続してこそ本当の「村廻し」である。今後も、本ワークショップのビデオテーク番組化など、伊勢大神楽に関するさまざまな研究と企画を展開していきたい。



ワークショップ本番で披露された「長水の曲」。室内では滅多に上演されない（撮影：出水伯明）